論　文

日本語を母語とする大学生の和製英語と英語学習に対する意識調査

片瀬紅実子・阿久津純恵

要旨

本研究は、日本語母語話者である大学生の英語学習に和製英語が与える影響を検証するために、和製英語に関する学習者の知識及び意識調査を行い、その分析結果をもとに、和製英語の適切な指導・導入によって、英語力向上に役立てる可能性を検討した。英語学習者の和製英語の使用傾向や認知度、和製英語に対する意識を調査するためにアンケートを作成し、調査対象者である学習者の英語語彙レベルや英語学習に対するモチベーションとの相関について分析を行った。アンケートデータを用いた調査結果から、調査対象者は、日本語で使用されている英語由来の和製英語に対する認知度は高いが、和製英語を英語学習に活用するかどうかについては肯定的・否定的な意識が観察され、和製英語の使用と英語語彙レベルや英語学習モチベーションとの関係が弱いことが明らかとなった。

キーワード：和製英語、英語教育、アンケート、英語学習、モチベーション

1．はじめに

ますます急速に拡大する国際化や複雑化する国際情勢、さらにより洗練された技術革新などに伴い、日本語にもさまざまな影響があり、なかでも日本社会において使用される外国語や外来語の増加や日本語への影響が指摘されている。文化庁（1995）による「第20期国語審議会」は、「国際社会への対応に関すること」として、外来語の増加や日本語の中での外国語の過度の使用の問題をあげており、外来語及び外国語の使用に注意を喚起する報告をまとめている。社会状況の変化に伴い、外国語や外来語が、日本語の乱れの要因の一つとして考えられているだけでなく、外国語学習への弊害となる可能性も指摘されている。国立国語研究所が2018年に実施した調査では、外来語や外国語などのカタカナ語について、ますます増加傾向にあり、日本社会のあらゆる分野において、社会活動や経済活動に大きな影響力を持つ現状が明らかとなっている。

このような言語環境において、日本語母語話者である大学生の英語学習者は、カタカナ語をどのように捉えているのか調査し、さらに英語力育成へ活用する可能性について検討するために、2022年度にアンケートが実施された。このカタカナ語意識に関するアンケート調査では、英語由来のカタカナ語が一種の共通知識・共通語として使用されている日本社会において、学習者のカタカナ語に対する意識を高め、カタカナ語を英語学習に活用する教育方法には意義があることが示唆された（片瀬・阿久津, 2022）。日本語においては、英語由来の新しいカタカナ語が使用され、素早く定着していく様子が多く観察されており、英語学習者の既知の英語語彙としてカタカナ語への言語意識を高める指導を行うことで、学生の語彙力をより効率的に向上させる教育的取り組みには有用性があると思われる。

しかしながら、カタカナ語を日本語の乱れの一要因と捉えると、語学教育への負の影響も指摘される。英語

教育においては、カタカナ語や和製英語に関して、英語学習者の認知・使用状況だけでなく、誤用傾向も多く報告されている（河内 , 2019; Daulton, 2007）。特に、英語からカタカナ語として日本語に導入される際の「音声・発音」及び「意味」の変化については、英語学習者の混乱を引き起こしていることが報告されており、指導に際しての重要な留意点として指摘されている（Olah, 2007）。和製英語については、英語の誤用を引き起こす「負の影響」として取り上げられることが多く、英語教育におけるより実践的で適切な指導が課題となっているのが現状である（Oshima, 2003; Norman, 2012）。

本稿では、和製英語に着眼し、日本語を母語とする大学生英語学習者の英語力養成のために、どのような教育的アプローチに有用性や可能性が見られるかについて検討することを目的とし、調査対象者である学習者が、英語に基づいた和製英語について抱いている意識を考察する。本調査においては、「外国語」、「外来語」、「カタカナ語」、「カタカナ外来語」、「和製英語」などの用語に意味の重なりを伴う混乱の要素があるため、本稿で取り扱う「和製英語」を「英語に基づいて作られ、日本語で使用されている和製英語」と定義した。この調査は、日本語における和製英語の使用傾向や、英語学習における和製英語の影響について、リッカート尺度と自由記述を組み合わせたアンケート調査により、日本語を母語とする大学生の英語学習者が、和製英語についてどのような認知状況であるか、和製英語と英語語彙レベルや英語学習に対するモチベーションにはどのような関係性があるかを明らかにすることを試みる中で、日本語において増加傾向にある和製英語を、英語教育における語彙教育に組み入れる意義と有効性について、調査分析結果をもとに検討した。

２．研究の目的と方法

２．１　目的

本調査の目的は、日本語を母語とする大学生の和製英語に対する意識と使用状況について、その実態を把握することにある。大学生英語学習者を対象に、以下の 2 点について検討する。

１）日本語における和製英語についてどのような使用および認知状況にあるか。

２）日常生活での和製英語の使用と英語語彙レベルや英語学習モチベーションとの間にどのような関係があるか。

２．２　方法

2. 2. 1　対象者

本学で英語科目を受講する日本語母語話者 98 名を対象とした。詳細は以下の通りである。

①学年：1 年生 57 名、2 年生 11 名、3 年生 24 名、4 年生 6 名

②学部：学校教師学部 24 名、英語情報マネジメント学部 38 名、観光ビジネス学部 15 名、総合経営学部 21 名

2. 2. 2　調査実施時期

2023 年 6 月最終週

2. 2. 3　質問紙の構成と手続き

アンケートフォームの冒頭で、この研究の趣旨を述べ、調査内容をこの研究の目的以外で使用しないこと、

個人情報の管理を徹底すること、調査への参加は任意であり、同意書提出後に撤回できること、また不参加により成績評価などいかなる不利益も生じないことを文書と口頭の両方で説明し、研究協力について同意の上で回答を得た。なお、質問紙の構成は以下の通りである。

(1)　フェイスシート

被験者の全体像をとらえるため、学年、専攻、性別、英語学習歴（学校・習い事を含む学習スタイルについて、読み書き又はコミュニケーション重視等）、英語圏への渡航歴、関心分野（複数回答可）について問う項目を設けた。

(2)　和製英語に関する知識

和製英語の定義を提示し、日常的に使用されている英語由来の和製英語について、被験者の認知度を問う質問を 10 項目準備した。対象とした和製英語は、丸善出版『和製英語事典』に記載のある語のうち、一般的な大学生にとって身近と思われる「ビジネス」「人・生活」のカテゴリーの中から抽出した。さらに比較的認知度が高いと思われる、グレードアップ、イメージチェンジ、クレーム、ナイーブ（意味のずれ / pseudo-English）、ドル、ユーモア（発音のずれ / phonological change）、リストラ、コネ（短縮形 / shortening）、パソコン、フリマ（縮約語 / shortening & combination）を選定し、それぞれ望月（2012）と Olah（2007）を参考とした借用語分類を行った。

それぞれの和製英語の使用例と由来となっている英単語を示し、両方に対する認知度について、回答を 5 件法（1. 知らない、2. 聞いたことがある、3. 知ってはいるが英語で正しく使えない、4. 英語でほぼ正しく使える、5 . 英語で正しく使えると思う）で求めた。

(3)　英語学習・モチベーション

被験者の英語学習に関するモチベーションと、日常での和製英語の使用や和製英語の英語学習への活用にはどのような関係があるかを調べるため、英語学習全般、英語 4 技能、発音についての意識や到達目標を問う項目を設けた。質問項目は 10 問で、6 件法（1. 全く当てはまらない、2. 当てはまらない、3. やや当てはまらない、4. やや当てはまる、5. 当てはまる、6. 非常に当てはまる）で回答を求めた。

(4)　日本語の中の和製英語・英語学習における和製英語

「日本語における和製英語意識」と「英語学習における和製英語使用」に関して、被験者の認知状況を調べるため、それぞれ 10 問の質問を設け、6 件法（1 . 全く当てはまらない、2. 当てはまらない、3. やや当てはまらない、4. やや当てはまる、5. 当てはまる、6. 非常に当てはまる）で回答を求めた。計 20 問中 2 問（「日常生活で和製英語はなるべく減らしていくべきだ。」「日常生活で和製英語はもっと増やしていくべきだと思う。」）については、回答を選択した理由を問う質問を追加し、選択式（6 択、複数回答可）で回答を求め、アンケートの最後に和製英語について感じたことや考えについて自由記述でコメントを求めた。

３．結果と考察

回収した質問紙のうち、5 件法や 6 件法による回答データには統計ソフト IBM SPSS Statistics 25 を、自由記述による回答データは質的データ分析支援ソフト Nvivo を用いて分析した。今回の調査では、これまでの

英語学習歴や英語圏への渡航歴については突出した回答がみられなかったため、調査対象者すべての回答について、和製英語に関する知識、英語学習に対するモチベーション、英語語彙力を中心に、データ分析を行った。

３．１　和製英語に関する知識

質問項目「和製英語に関する知識」に対する５件法での回答について、平均値と標準偏差を算出した。「パソコン（*M*=3.79, *SD*=1.37）」「フリマ（*M*=3.77, *SD*=1.27）」の順に平均値が高く、「イメージチェンジ（*M*=1.91, *SD*=1.09）」「クレーム（*M*=2.22, *SD*=1.25）」の順に平均値が低く、本調査では「縮約語」の認知度が高く、「意味のずれ」の認知度が低い結果となった。 10 語すべての平均値が「4. 英語でほぼ正しく使える」を下回り、総じて和製英語を認知はしていても、英語として正しく使えていないという様子が窺えた。

３．２ 「英語学習・モチベーション」と「日本語の中の和製英語・英語学習における和製英語」

6 件法を用いた質問項目「英語学習・モチベーション」と「日本語の中の和製英語・英語学習における和製英語」に対する回答について、最尤法による因子分析を行った。因子数を指定せずに実行したところ、固有値 1.0 以上の 7 因子解が得られた。因子間に相関が予想されたため、因子軸の回転にはプロマックス法を用い、結果の解釈には因子パターン行列を適用した。さらに、項目を精選するため、それぞれの因子において負荷量が 0.35 未満の 2 項目を削除し、残った 28 項目を再度同様の手法で因子分析を行った結果、4 因子解が得られた（表 1）。

第 1 因子は「英語のリーディングの際に、日本語での和製英語の知識が役に立つと思う」「日常生活で和製英語はもっと増やしていくべきだと思う」などの項目が高い因子負荷を示していたことから「日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識」と名付けた。第 2 因子は「わたしは英語が好きだ」「わたしは英語で話せるようになりたい」といった項目によって構成されていたため、「英語学習に関するモチベーション」と名付けた。第 3 因子は「日常生活で和製英語を使う方だ」「日常生活で和製英語を使われることに抵抗はな

表１　項目と因子パターン行列（プロマックス回転後）

項目	I	II	III	IV
I　日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識				
Q34. わたしは英語でのリーディングの際に、日本語での和製英語の知識が役に立つと思う。	**.92**	-.08	.01	.05
Q33. わたしは英語でのリスニングの際に、日本語での和製英語の知識が役に立つと思う。	**.91**	-.15	.06	-.08
Q39. わたしは和製英語は英語力を高めるのに役立つと思う。	**.89**	-.02	-.08	-.02
Q37. わたしは和製英語の意味を知っていると、英語の発音を覚えるのが楽になると感じる。	**.85**	.01	-.11	.10
Q32. わたしは英語でのライティングの際に、日本語での和製英語の知識が役に立つと思う。	**.77**	.02	.00	-.03
Q31. わたしは英語でのスピーキングの際に、日本語での和製英語の知識が役に立つと思う。	**.73**	-.10	.13	-.13
Q35. わたしは和製英語の意味を知っていると、英単語を覚えるのが楽になると感じる。	**.64**	.13	.05	.07
Q20. わたしはネイティブのような発音が出来るようになることが重要だと思う。	**.39**	.31	.01	.13
Q30. わたしは日常生活で和製英語はもっと増やしていくべきだと思う。（全般）	**.38**	.07	.11	-.04

II　英語学習に関するモチベーション				
Q11. わたしは英語が好きだ。	-.09	**.89**	.04	-.03
Q13. わたしは英語の語彙学習が好きだ。	.21	**.79**	-.07	.08
Q12. わたしは英文法について学ぶことが好きだ。	.18	**.73**	-.14	.11
Q15. わたしは英語でコミュニケーション（対面・SNS を含む）を取ることが好きだ。	-.19	**.72**	.05	-.10
Q14. わたしは英語で話せるようになりたい。	-.02	**.66**	.09	-.08
Q17. わたしはインターネット（SNS を含む）や本などで英語での情報を読み取れるようになりたい。	.01	**.65**	.14	-.04
Q16. わたしは音楽、動画、映画などで英語を聞くことが好きだ。	-.14	**.64**	-.09	-.05
III　日常生活における和製英語の使用				
Q23. わたしは日常生活で和製英語を使うほうだ。（話す）	-.08	-.08	**.88**	-.01
Q24. わたしは日常生活で和製英語を使うほうだ。（書く）	-.09	.02	**.79**	.09
Q21. わたしは日常生活で和製英語を耳にする。（聞く）	.01	.01	**.75**	.07
Q25. わたしは日常生活で和製英語を好んで使う方だ。（全般）	.03	.01	**.72**	-.01
Q22. わたしは日常生活で和製英語を目にする。（読む）	-.01	.02	**.66**	.14
Q27. わたしは日常生活で和製英語を使われることに抵抗はない。（全般）	.18	.10	**.57**	-.20
Q28. わたしは日常生活でよく使われている和製英語の意味があやふやでも気にしない。（全般）	.15	-.06	**.44**	-.12
Q26. わたしは日常生活でよく使われる和製英語を、意味が分からなくても使うことがある。（全般）	.17	.07	**.36**	.10
IV　日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識				
Q38. わたしは和製英語は正しい発音を学ぶ妨げになると思う。	.07	-.07	.07	**.94**
Q36. わたしは和製英語は英単語学習の妨げになると思う。	-.06	-.04	-.01	**.86**
Q40. わたしは和製英語は正しい英語を学ぶ妨げになると思う。	-.20	-.01	.04	**.73**
Q29. わたしは日常生活で和製英語はなるべく減らしていくべきだと思う。（全般）	.15	.03	-.01	**.59**

い」などの項目によって構成されていたため、「日常生活における和製英語の使用」と名付けた。第 4 因子は「和製英語は正しい発音を学ぶ妨げになる」「日常生活で和製英語はなるべく減らしていくべきだと思う」といった項目によって構成されていたため、「日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識」と名付けた。

以上の因子分析によって得られた 4 因子の項目数にはばらつきがあるため、下位尺度得点は各項目の平均値とした。表 2 に、各尺度における平均値と標準偏差を示す。

表２　４因子の記述統計量

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識	98	1	5.44	3.68	0.95
英語学習に関するモチベーション	98	1.43	6	4.00	1.02
日常生活における和製英語の使用	98	1	6	4.05	0.94
日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識	98	1	6	3.23	1.11

尺度の内的整合性を検討するため、クロンバックのα係数を算出したところ、「日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識」でα =.91、「英語学習に関するモチベーション」でα =.89、「日常生活における和製英語の使用」でα =.86、「日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識」でα =.86の値が得られ、概ね十分な値であった。

各因子を構成する項目の下位尺度得点の度数分布を確認すると、「英語学習に関するモチベーション」下位尺度得点（*M*=4.00, *SD*=1.02）、「日常生活における和製英語の使用」下位尺度得点（*M*=4.05, *SD*=0.94）で、ともに「4」（「やや当てはまる」）以上とやや高く、英語学習に前向きではない被験者も少なからず見受けられるが、同時に英語力の向上に意欲的な様子が観察され、また、日常生活で和製英語を多く使用していることに自覚があることがわかった。一方、「日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識」下位尺度得点（*M*=3.68, *SD*=0.95）と「日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識」下位尺度得点（*M*=3.23, *SD*=1.11）は、共に「4」（「やや当てはまる」）未満で、肯定的な意識が否定的な意識よりもやや上回ったが、日常生活においても英語学習においても、和製英語に対し強い意識がある結果とはならなかった。

また「日常生活における和製英語の使用」と「日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識」の間には弱い正の相関（*r*=.37, *p* <0.01）があったが、和製英語を肯定的にとらえているからといって必ずしも積極的な使用に繋がるという結果とは言えなかった。各因子の下位尺度間相関は表の通りである。

表３　日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識と諸尺度間の相関

	日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識	英語学習に関するモチベーション	日常生活における和製英語の使用	日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識
日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識	1	0.15	.37**	-0.04
英語学習に関するモチベーション	0.15	1	.21*	0.11
日常生活における和製英語の使用	.37**	.21*	1	.20*
日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識	-0.04	0.11	.20*	1

*p<.05, **p<.01

「日常生活における和製英語の使用」と「英語学習に関するモチベーション」に弱い正の相関（*r*=.21, *p* <0.05）あり、「日常生活における和製英語の使用」と「日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識」にも弱い正の相関（*r*=.20, *p* <0.05）が見られ、英語学習に関するモチベーションが高いほど、和製英語を使用する傾向がやや見られる一方で、和製英語に対する否定的な意識を持ちつつ、和製英語を使用している傾向が考察された。

３．３　英語語彙レベルおよび４因子の関係

抽出された４因子「日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識」「英語学習に関するモチベーション」「日常生活における和製英語の使用」「日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識」と英語語彙レベルの関係を調べるため、Victoria University of Wellington が提供している「語彙レベルテスト」を実施した。本調査では、The New Vocabulary Test（Bilingual Japanese）のうち、時間的制約及び被験者の負担軽減措置から、基本語彙をカバーした Part 1 と Academic Word List をカバーした Part 6 を採用した（Mclean & Kramer 2016）。

「語彙レベルテスト」のスコアで被験者を３群に分け、分散分析で各下位尺度得点を比較した。尚、スコアは、被験者 98 名のうち未受験の７名を除いた 91 名分を用いた。スコアの平均値と標準偏差（M=35.08, SD=9.60）から、対象者を３群（1 群 =< 30.08, 2 群 =30.08< 40.08, 3 群 =>40.08）に分けて独立変数とし、「日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識」「英語学習に関するモチベーション」「日常生活における和製英語の使用」「日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識」を従属変数とした分散分析を行った。表４の通り群間の得点差は「英語学習に関するモチベーション」のみ 0.5% 水準で有意であった（F（2, 90）= 4.69, p <.05）。

表４　英語語彙レベルと４因子の分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識	グループ間	3.03	2	1.52	1.67	0.19
	グループ内	79.82	88	0.91		
	合計	82.85	90			
英語学習に関するモチベーション	グループ間	9.38	2	4.69	4.69	0.01
	グループ内	87.99	88	1		
	合計	97.37	90			
日常生活における和製英語の使用	グループ間	3.95	2	1.98	2.18	0.12
	グループ内	79.78	88	0.91		
	合計	83.73	90			
日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識	グループ間	6.43	2	3.22	2.63	0.08
	グループ内	107.6	88	1.22		
	合計	114.03	90			

また、Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を行ったところ、3 群＞ 2 群＞ 1 群という結果が得られた。この結果から、語彙レベルが高いほどモチベーションが高いことがわかったが、和製英語に対する肯定的な意識や否定的な意識だけでなく、日常生活における和製英語の使用についても、語彙レベルによる差は見られなかった。このことからも、語彙レベルを問わず、学習者の和製英語に対する意識は曖昧であることが推察される。

また、語彙レベルテストスコアと４因子の相関については、語彙レベルテストスコアと「英語学習に関する

表５　英語語彙レベルと各因子間の相関

因子	語彙測定スコア
日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識	-0.12
日常生活における和製英語の使用	0.03
英語学習に関するモチベーション	.36**
日常生活・英語学習における和製英語に対する否定的な意識	0.09

*p<.05, **p<.01

モチベーション」の間には弱い正の相関（$r = .36, p < .01$）が見られ（表5）、これまでの分散分析と多重比較の分析結果との矛盾は見られなかった。

英語語彙レベルと英語学習モチベーション以外の因子間に関連がなく、和製英語の使用は恣意的で、和製英語に対する意識にも論理性や一貫性はないように見受けられる。

３．４　選択肢複数回答式の項目

第3因子「日常生活における和製英語の使用」の中の2項目「わたしは日常生活で和製英語はもっと増やしていくべきだと思う。」と「わたしは日常生活で和製英語はなるべく減らしていくべきだと思う。」については、6件法で回答を求め、その理由を選択肢複数回答方式で求めた。「増やしていくべき」に対する回答の平均値は3.19、「減らしていくべき」に対する回答の平均値は2.90となり、「増やしていくべき」の平均値が0.29高かった。「増やしていくべき」理由として最も多かったのが「和製英語では新しい物事や考え方を表すことができる（39件）」で、「和製英語を使った方がカジュアルな感じがする（18件）」、「和製英語は話が通じやすく便利である（16件）」、「和製英語では同じ意味でこれまで使っていたことばの暗いイメージをなくすことができる（16件）」と続いた。一方で、「減らしていくべき」に対する回答を選択した理由については「どれも当てはまらない（50件）」が多く、そもそも和製英語の使用を減らすべきとは思っていないか、思っていても別の理由があるか、もしくは明確な理由がないのか、さらなる調査が要される結果となった。

３．５　「自由記述」

アンケートの最後に、自由記述コメント項目「アンケート回答後、和製英語と英語学習について感じた事や考えを自由に述べてください」を設け、学生の意識分析を試みた。回答件数98件について、SPSSによる定量的分析による因子を手がかりに、質的データ分析支援ソフトウェアNvivoを用いて定性的に分析し、今後の教育実践における指導について検討した。表6の自由記述コメント使用語彙頻度を確認すると、「意味」や「発音」に関する回答が多く、また「使う」「覚える」「知る」という単語から「学習」に関連する回答内容も多数観察されることがわかる。

表６　自由記述コメント使用語彙頻度

	使用語彙	頻度
1	英語	190
2	カタカナ	119
3	思う	114
4	語	92
5	使う	76
6	和製	72
7	意味	64
8	覚える	51
9	発音	40
10	感じる	38
11	学習	32
12	知る	30
13	違う	29
14	しまう	26
15	やすい	24

それぞれの語彙を手がかりに、NVivo のテキスト検索クエリを実行し、ワードツリーを探索した。さらに回答内容のコーディングを行い、階層チャートを使用することで、主要なテーマの考察を行った。その結果、学習に際しての意味の理解についてのコメントが主要なテーマを占めていることがわかり、また、意味の違いだけでなく、英語を話す際の発音の問題を気にかけていることが確認できる。回答の内容には、和製英語に対する肯定的な見解や否定的な意見が混合しており、これらの分析の結果は、以下のように要約できる（表7）。

表７　自由記述コメント分類

キーワード	肯定	否定
意味	．英単語の意味を推測するヒントになる。 ．英単語を記憶する助けになる。	．単語の意味の違いから、英単語学習において、記憶の妨げになる。 ．単語の意味が異なると、英語学習において誤用の原因となる。
発音	．英語と同じ発音の和製英語であれば、発音のイメージに役立つ。 ．日本語でのコミュニケーションでは、和製英語の発音が役立つ。	．間違えた発音を覚えてしまうと、英語学習の妨げになる。 ．和製英語で間違えて覚えてしまった発音から、正しい英語の発音に直すことは難しい。
学習	．和製英語の存在を知っていた方が、正しい英語学習に繋げることができる。 ．和製英語は難しいが、興味深いので、英語のボキャブラリーを増やす学習に活用したい。	．単語のニュアンスの違いから、英語でのコミュニケーション能力を高める妨げになる。 ．本当の英語がわからなくなるので、和製英語は学習しない方が良い。

さらに、和製英語は英語ではないと理解した上で英語学習に役立つと考えている学生や、意味や発音の違いのために英語学習の弊害になることを指摘しているコメントもみられた。

- わたしは和製英語は英語とはまた別のものであると思って使っているので、あまり英語学習に支障はないと思います。また単語を覚える際に和製英語を知っていることによって本当の英語の単語を覚える際にヒントになると思います。(S2023-S49)
- 和製英語を覚えてしまうと間違えた意味や発音で覚えてしまうため英語学習の妨げになると思う。(S2023-S34)

また、和製英語の数の多さから日常生活においては避けられない状況にあることも指摘されている。

- 和製英語も日本でできた文化なので無くすことはしなくてもいいと思いますが英語だと違う意味になるということを理解しておいた方がいいと思います。(S2023-S29)

今回のアンケート調査により、改めて和製英語の存在を意識し、興味・関心を持つ機会となっただけでなく、英語学習との関連について考える機会となったことがうかがえた。

- 和製英語は無くすというよりは、共存した方がいいと思います。むしろ私が知らない和製英語が他にもありそうなのでもっと知っていきたい。(S2023-S28)

このように、学生の自由記述コメントから、和製英語を適切に導入・活用することで、英語教育に活用できる可能性が示唆された。

4　まとめ

本稿では、日本語母語話者である大学生を対象に、和製英語と英語学習の関係について調査を行い、日本語において使用されている和製英語の使用と認知状況、和製英語の使用と英語語彙レベルや英語学習モチベーションとの関係について考察した。様々なメディアで和製英語が使用されている社会状況において、日本語としての和製英語に対する肯定的な意識と否定的な意識が混在していることが明らかとなった。また、日常生活においては、和製英語の使用が見られるが、英語語彙レベルとの相関はなく、英語学習モチベーションとの強い相関も見られなかった。学生の自由記述には、和製英語を日本語として捉え、英語学習に際しての弊害となる点を懸念する慎重なコメントがある一方で、英語の語彙学習に役立つ可能性も指摘されており、英語教育に和製英語を活用する際に留意すべき点が示唆されている。日本社会において高頻度で使用されている和製英語を活用し、正しい英語表現の導入や理解を促す教育アプローチの有用性は検討の余地があり、母語を活用した英語学習の促進においても潜在的な可能性があると考えられる。

本研究は、日本語母語話者である大学生英語学習者のカタカナ語・和製英語への関心や興味を育み、正しい英語表現を導入することで、日本語と英語の言語的・文化的差異を意識させ、潜在的言語能力を育成する教育的可能性を探求することを目的として実施された。カタカナ語・和製英語は、日本社会の言語使用状況において、増加傾向にあるだけでなく、その幅広いジャンルにおける使用状況からますます言語的な変化や影響が大きくなってきており、学習者の母語や英語学習により大きな影響を与えうると考えられる。 2022 年度に実施した「大学生のカタカナ語の知識・使用状況と英語学習におけるカタカナ語に対する意識調査」による結果（片瀬・阿久津 , 2023）と合わせ、日本語が英語に与える影響を分析することで、日本語母語話者に対するカタカナ語・和製英語を活用した英語教育における具体的指導方法の提案が今後の課題である。

本調査では、調査対象者が研究者の担当する英語クラスの学生に限定されており、包括的な意識調査結果と解釈することはできないが、母語や英語学習歴などについては、大きな相違のないグループに対しての調査を行うことができ、今後の教育実施に対して有益な示唆があった。しかしながら、語彙レベルの指標として、語彙レベルテストの簡略版を使用したことについては、今後は外部テストの使用など、よりデータの信頼性を高めるための検討が必要であり、また調査対象とした和製英語の分類や質問数についても、再考が要される。さらに、第 1 因子「日常生活・英語学習における和製英語に対する肯定的な意識」の中に「わたしはネイティブのような発音が出来るようになることが重要だと思う」という、因子ラベルにそぐわない項目が入った。これは、「意味が通じるレベルの発音」と「ネイティブのような発音」を学習者が区別できていなかったためか、他の理由があるのか、サンプル数の増加や質問項目の精査で明らかにすることが求められる。また、「和製英語は減らすべきである」という回答理由の選択肢について「当てはまらない」が最も多く、「増やすべきである」という回答理由ほど明確にならなかった。この点についても選択肢の数や内容の精査が要される。今回の調査結果をもとに、学習者の既知の知識を活用し、より汎用性の高い教育方法として実際の教育実践を行い、学習者の英語力だけでなく、言語や文化への関心度の変化をより詳細に分析することにつなげていきたい。

参考文献

片瀬紅実子・阿久津純恵（2023）「大学生のカタカナ語の知識・使用状況と英語学習におけるカタカナ語に対する意識調査（科研研究課題 20K00758）」『神田外語大学紀要』第 35 号 153-169.

亀田尚己・青柳由紀江・J. M. クリスチャンセン（2014）『和製英語辞典』丸善出版 .

河内千栄子（2019）「大学生の外来語意識 : 外来語親密度や英語語彙サイズとの関係」『久留米大学外国語教育

研究所紀要』第 26 号 47-62.

国立国語研究所（2018）『平成 30 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要』国立国語研究所 .

望月通子（2012）「基本語化を考慮したカタカナ外来語の学習と教材開発―その振り返りと新たな開発に向けて―」『関西大学外国語学部紀要』第 6 号 1-16.

文化庁（1995）『新しい時代に応じた国語施策について』https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/tosin02/index.html

Daulton, F.（2007）. Japan's Built-in Lexicon of English-Based Loanwords. Clevedon, UK: Multilingual Matters.

McLean, S., & Kramer, B.（2016）. The development of a Japanese bilingual version of the new vocabulary levels test. VERB, 5(1), 2-5.

Norman, J.（2012）. Japanese university student awareness of waseieigo. In A. Stewart & N. Sonda（Eds.）, JALT 2011 Conference Proceedings, 442-454.

Olah, B.（2007）. English loanwords in Japanese: Effects, attitudes and usage as a means of improving spoken English ability. Journal of the Faculty of Human studies, Bunkyo Gakuin University, 9（1）, 177-188.

Oshima, K.（2003）. An overview of gairaigo studies: Implications for English education. Educational Studies, 45, 151-158.